

講義ノート (8)

モロッコ調査 (その2)

～ハムザ村から～

専門調査員時代 (1985～87年) の約3年のあいだ、モロッコ各地を北から南まで丹念に歩き回りましたが、大都市を除いて、地方へ行くと必ず出くわすのが「部族」でした。部族ともうひとつ「ザーウィヤ (イスラーム教団)」というのが、どうやらモロッコの社会生活を理解する上で欠かせない二大要素であることが確信できました。今日お話しするハムザ村は私にそうした認識の契機を与えてくれた大事な村です。

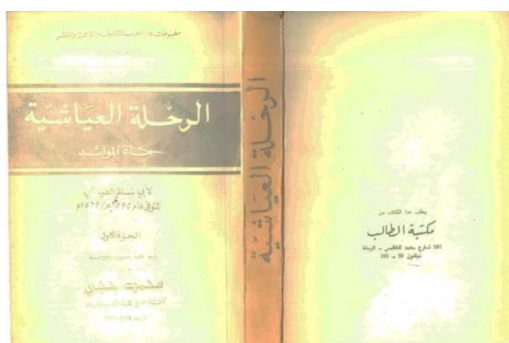
きっかけはこれもまた偶然でした。モロッコの北東から南西に延びる大アトラス山脈はモロッコ全体を海岸平野部とサハラ砂漠とに分ける背骨のような、三千メートル級の山々を擁する巨大な山塊ですが、その南のサハラ砂漠地帯を自分の小さな愛車 (Peugeot 205) で一人で砂埃まみれになってピスト (=ピストというのは未舗装のでこぼこ道のことです。フランス語から) を走ったあと、ようやく舗装道路に乗って、現在のモロッコ王家 (アラウイー朝) の発祥の地であるタフィラルト地方からアトラス山脈を越えて古都フェズまで行こうとしていたときのことです。峠越えの幹線道路の途中にリーシュという町があって、そこで昼食を食べたあと町の門を出ると、二人の男が道端で手を挙げて乗せてくれということです。私自身若い頃からヒッチハイカーでしたから、自分の車に余裕があればできるだけ乗せることにしています。行き先を聞いたら「ザーウィヤ・スイディ・ハムザ」というのですが、私は聞いたことがありません。「それ、どこ？」というと「すぐそこ」というので、まあいいか、と乗せてやりました。でも彼らの指示通りに走り出したらまたピストです、ウンザリ。車内で私が二人にどこから来たのか尋ねると、カサブランカだということです。ずいぶん遠くから来たものです。いまから参詣 (ズィヤーラ) に行くというのですが、私もモロッコのおもな参詣地 (聖者廟) はだいたい訪れていたもので、そんな遠方からわざわざ訪れるような聖者廟がこんな所にあったかなあと不思議に思っていました。そして「すぐそこ」というのになかなか目的地にたどり着かず、結局 20 キロくらい走りました。ピストの 20 キロというのはかなりの距離です。

ようやく村に着くと、彼らは「ここでいいから」と降りてゆきました。一人で山間の僻村に取り残され、日も傾いてきたので、どうしようかなあと思っていると、薄暮の中に一軒だけ電灯がともっている家がありました。いまから真っ暗になるピストの道を引き返すのもいやなので、とりあえずその電気のついている家に泊めてもらえないかどうか行ってみることにしました。ところがそこは「マルカズ」だったのです。マルカズというのは警察や憲

兵などの詰め所で、怖い場所です。でもこういう田舎へ来たらずマルカズへ行って自分の身分と滞在目的を先んじて明かすのが安全なのがわかっていましたから、結果としてはよかったかな思いました。どおりで一軒だけ電気がついていたのは、マルカズが自家発電していたからで、他の家々を見渡すとどこも真っ暗でした。さてマルカズで憲兵に事情を話して、どこか泊めてくれるところはないだろうかと相談すると、隣に内務省から出向している役場長代理（ハリーファト・ル・カーイド）の家があるから、そこに泊まれということになりました。

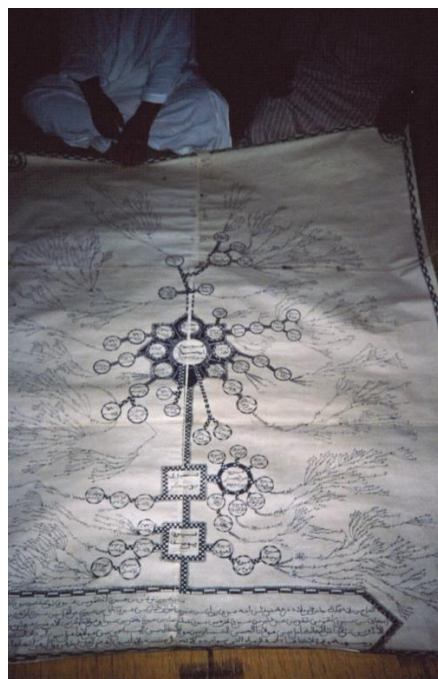
翌朝目を覚ますと、素敵な村だということがわかりました。村には電気も水道もありませんでしたが、村の真ん中には夏なのにかかなりの水量をたたえた小川が流れていて、すくって顔を洗うと冷たくて気持ちがよいし、見渡すと、岩ばかりのアトラス山中とは思えない青々とした糸杉の林やクローバー畑が広がり、たくさんの牛も草を食べています。桃源郷ではないかと思ったくらいです。「電気も水道もない」というのはみずぼらしさの象徴のように用いられる表現ですが、まったくそんなことはありません。必要なんですね。もっとも現在では電気も水道も引かれ、ツーリスト用のオーベルジュ（食堂兼宿泊所）までできたと聞いています。

さて、私はどうも生来行き当たりばったりの性分なので、せっかく泊まったのだからもう数日ここにいてみようと思い、村の内外の散歩に出ました。そして村の奥まったところに「ヒザーナ」（文庫）があると聞いたので、そこに行ってみました。ヒザーナというのは、ある程度の規模の聖者廟（ないし教団）にゆくと必ずといってよいほど附置されている図書館のようなものです。ということは聖者廟もあるに違いない。きっと昨日乗せた二人が行こうとしていたところだ。ヒザーナでは管理人のおじさんが出てきていろいろ説明してくれました。そして、この村に聖者ブ・サーレム・ル・アイヤーシュの墓廟があると知らされ、「そうだったのか」と驚くとともに嬉しくなりました。ブ・サーレム・ル・アイヤーシュというのは17世紀の人で、有名なメッカ巡礼記を書いたイスラーム学者です。その後聖者扱いされるようになって、年に一回彼に因む聖者祭（ムーセム）がおこなわれるということは以前から聞いていたのですが、その場所がどこなのかわからなかったのです。こんなところで偶然出くわしたという驚きは尋常ではありませんでした。なお彼の書いた巡礼記は、モロッコの大学入学統一試験（バカロレア）によく出題されるというので、受験生は必ず読んでおくそうです（下の写真）。



ところで皆さんもこんがらがっているんじゃないかと思いますが、私も当初混乱しました。ふつう全国から参詣者を集めるような有名な墓廟のある土地にはその聖者の名が付けられています。でもここはブ・サーレムでもアイヤーシュでもなく、誰かしらないハムザという名になっている。ハムザっていったいだれなんだ。

ヒザーナの管理人さんは奥からうやうやしくブ・サーレムの遺品を取り出してきて、「これは以前は参詣者に触らせていたんだけど、だいぶ痛んできたので、いまはだれにも見せない。おまえは触ってもいいよ」と言って、ブ・サーレムが使ったというランタンや鞆や靴や衣類などを見せてくれました。ふつう参詣者はこうしたものにはバラカ（御利益）が宿っているといってありがたく触ります。私もそうさせてもらいました。しかし同席していたハムザ教団（ザーウィヤ・ハムザーウィーヤ）の教団長がそのあと引っ張り出してきた巨大な系図のほうにむしろ私の関心は向かいました。この村に住むブ・サーレムの子孫たち全員が書き込まれた畳二畳分くらいある大きな系図です（下の写真）。



ブ・サーレム一族の系図

こんなものは見たことがなかったので面食らいましたが、これが解読できればいろいろなことがわかるかもしれない。しかしただ系図を眺めているだけではラチがあかない。そこで居合わせた教団長さんに説明を求めたのですが、彼は「自分はあまりよく知らないから古文書を読め」といって文庫の中に保管されたくたびれた書籍群を見せてくれました。しかし「ここにあるものはたいしたものじゃない。大事なものはラバトにある」というのです。

モロッコの他の場所のヒザーナも同様なのですが、おそらく 1950~60 年代を中心に、モロッコ政府が全国津々浦々のヒザーナに保管されていた重要な文書を首都のラバトに集めたのです。表向きの理由は「田舎の保存状態の悪い場所に置いておいたらすぐに劣化するから、きちんと保存管理できるラバトに集めておく」ということだったようです。それはその通りだと思うのですが、さまざまな情報を政府（王家）の管理下に集中させるのが本当の目的だったと思われます。なおラバトにはそうした重要な文書を集めた図書館が二つあって、一つは「一般図書館（ヒザーナト・ル・アーンマ、Bibliothèque Generale）」、もう一つが「王宮図書館（ヒザーナト・ル・ハサニーヤ、Bibliothèque Royale）」です。前者はだれでもアクセスできますが、後者は特別な許可が必要になります。

さて最初のハムザ村滞在からラバトに戻った私は、村のヒザーナでリストアップしてもらった基本文献の幾つかを一般図書館のほうで確認できたので、さっそくコピーして読みあさりました。とはいえ手書きで、しかもマグリブ書体というちょっと厄介な代物だったので、モロッコ人の友人に手助けしてもらったのはいうまでもありません。中東（イスラーム圏）の場合アラビア語の古い文書がたくさんあるので、世界の他の地域のフィールドワークのように英語やフランス語ないしスペイン語、ロシア語等の欧米語で事足りるというわけにはゆかないところが悩みの種です。しかも歴史学者や文献学者と同じような作業をしなければならないのですから、フィールドワーカーに課せられた負担は並大抵ではありません。しかし逆に言うと「現在」が「過去」と緊密に結びついている様子を目撃できる特権を有しているともいえます。過去が現在に食い込み、現在が過去に食い込むという相互に絡み合った様相こそ、中東でフィールドワークをおこなう者が実感できる大きな利点なのです。過去に沈潜しているだけではだめだし、かといって現在に引きこもっていてもだめ。つまり現在と過去の境界線を取り払わなければ先には進めないのです。ここで注意しなければならないのは、「過去が現在を形作っている」というふうに単純化するのは間違っているし、逆に「現在が過去を作り出している」と単純化してもだめだということです。相互浸透というのをもっともふさわしい言葉かもしれません。どちらが欠けてもだめなんですね。

さてそうやってラバトである程度文書を調べてから、再びハムザ村へ行って話を聞いたりと周辺の部族調査をしたりして、またラバトで読んで村へ行って聞き回る、ということを数回繰り返しました。通いの調査といえばそれまでですが、村へ行くと最低でも数日間は滞在しましたから、結果的にはかなりの日数を村で過ごしたことになります。ただ、冬になると雪に閉ざされてアクセス不能になることだけは残念でした。ともかくそのようにしてわかったことを後日まとめた報告が《堀内正樹 1991 「モロッコにおける聖者をめぐる社会意識-聖者ブ・サレムの子孫たち」『中東の民衆と社会意識』（加納弘勝編）、アジア経済研究所。pp.85-126》です。ハムザという村名の由来や、ブ・サーレムの位置づけ、巨大な系図から読み取れること、さらにそれが現在のこの地域の社会構造とどのように関わっているか、などがおわかりいただけます。

こうしてハムザ村はおしまい、というわけにはゆきませんでした。この調査時点で判明したことが次の関心を引き起こしたのです。その最大のテーマは「よそ者が如何にして地元を受け入れられるか」という政治のしくみに関する事柄です。そこには二つのキーワードがあります。一つは「結婚」、もう一つは「バイア」です。

これらはハムザ村の調査の最初から感じていた疑問の暫定的な答えです。まず出発点は、ハムザ一族（ブ・サーレム一族でもかまいません）が元々は預言者ムハンマドの血を引く生粋のアラブ人であり、それに対して地元に住むのはほとんどがベルベル人の諸部族であるということ。どうやってアラブがベルベル社会に受け入れられ、そこで支持を獲得できたのか、これがわかればモロッコどころか北アフリカ全体の社会のしくみが理解できるのです。

下の図を見てください。これは私がハムザ一族の起源を簡単にまとめたものです。祖先は代々移動を続け、預言者ムハンマドから数えて24代目のユースフが初めてこの土地へやってきました。当時（17世紀頃）はまだハムザ村はなく、タズロフトというベルベル人の村があって（今でもあります）、そこにおそらく客人として居候し、その息子ブ・バクルがその村に定住しました。しかしまだ客人の身分だったことでしょう。さらにその子ムハンマドが重要になります。ムハンマドはタズロフト村の近くのフラスコウという村のアイヤーシュ族の娘と結婚したのです。タズロフト村にもアイヤーシュ族はいましたから、地元の部族の娘をもらったことになります。これでおそらく彼らはようやく地元の一員と見做されることになりました。そしてムハンマドに関してさらに二つ重要なことがあります。一つは「ディラーイー教団」（ザーウィヤ・ディラーイーヤ）で勉強したということ、もう一つがタズロフト村の隣りに新しい村を作ってモスクを建てたということです。これが現ハムザ村の礎です。そのムハンマドの息子が有名な聖者ブ・サーレムです。ブ・サーレムもまた父と同様にディラーイー教団で学び、父が開いた村に学校（マドラサ）を設立し、全国から学生を集めるような大イスラーム学者になりました。全国区になったということですね。そしてその息子がハムザです。ようやくハムザという名が出てきます。ハムザはディラーイー教団壊滅（この事件はこのあとの説明で大事になります）を受けて、実質的なその後継者となり、村に「アイヤーシュ教団」（ザーウィヤ・アイヤーシーヤ）を設立したのです。これ以降村はハムザの設立した教団の通称であるザーウィヤ・スイディ・ハムザと呼ばれるようになって今日に至ります（スイディというのは一般的な尊称ですから「～様」といったところでしょうか）。そして一族のニスバ（姓に相当）は、ムハンマドの嫁さんの部族アイヤーシュをとることになったのです。聖者ブ・サーレムの正式名称も「スイディ・アブドッラー・ブ・サーレム・ル・アイヤーシー」になります。アブドッラーというのが彼の名前で、ブ・サーレムはいわば商標のようなものですね。「安寧の父」といった意味になるでしょうか。そして彼が聖者扱いされるようになったのはだいぶ後の話です。

前史：

預言者ムハンマド（1）～娘ファーティマ（2）～娘婿アリー（3）～ハサン（4）  
・・・アラビア半島

イドリース1世（7）～イドリース2世（8）～・・・モロッコへ

アブドッラー（20）・・・フィグイグからドラアへ

1代ユースフ（24）

ムーレイ・ブアッザで修行ののち、タズロフト村に来て、没。

2代ブ・バクル（25）

タズロフト村に居住した。

3代ムハンマド（26）

ディラーイーヤ教団の2代。ムハンマドと3代。ムハンマド・ル・ハッジに師事して勉強。のちタズロフト村に帰って教育者に。タズロフト村の近くに別の村（現ハムザ村）を作って移住（1770年頃）。モスクも建立。近隣から多くの人々が参集。

フラスコウ村のアイヤーシュ族の娘と結婚

4代ブ・サレム（27）

父に師事し、のちディラーイーヤ教団で勉強。ハムザ村に学校を設立。モロッコ全土に名を馳せる著名な学者になった。全土から学生が集まり、一大学問センターに。

5代ハムザ（28）

父の遺志を継ぎ、村にアイヤーシュ教団を設立。壊滅したディラーイーヤ教団の実質的後継者に。村の名は彼に因んで付けられた。

さてこう見てみると、アラブが地元のベルベル諸部族の中で認められるには「結婚」が重要な条件だったことがわかります。そしてもう一つのキーワードだった「バイア」はザーウィヤ（イスラーム教団）との関係の中で立ち現れてきます。

話を進める前に「ザーウィヤ」について一応再確認しておきましょう。東アラブ（マシュリク）ではザーウィヤという言葉はだいたいスーフイー（イスラーム神秘主義）教団という意味で用いられ、ときにスーフイーの流派を示す「タリーカ」（「道」が原義）と同じ意味でも用いられます。そこはいわゆるイスラーム学の間であるマドラサ（学校）やジャーミア（大学）とはまったく異なった場であると認識されています。ところが北アフリカなどの西アラブ（マグリブ）ではザーウィヤというのはまったく違って、スーフイー教団ももちろん含みますが、むしろ正統なイスラーム学を学び、研究し、実践する場所というふうに捉えられています。ですからモスクもあればマドラサもあれば図書館もあれば学生用の寄宿舎もあればスーフイー用の修行場もあれば裁判所もあるといった具合です。一大文教センターといってもよいでしょう。小規模な場合にはローカルな政治・法・経済・行政・教育・宗教のセンターですが、規模が大きくなれば国家中枢と言ってもいいのです。

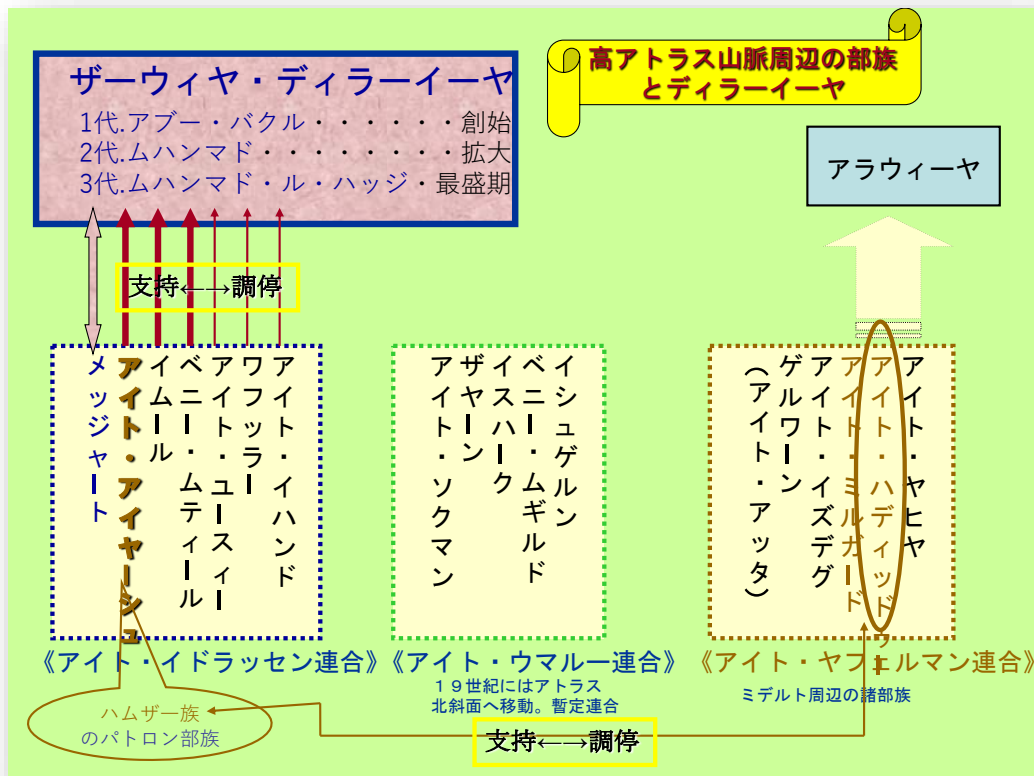
そうしたものとして「ザーウィヤ・ディラーイーヤ」を見てゆきましょう。初めてこの名前を耳にしたときには「なんじゃ、それ」と思ったのですが、調べてゆくうちにとんでもない教団だということがわかりました。下図は私が試作したモロッコ略史です。本当はこれに



17世紀前半にサアド朝が衰退し始めると、モロッコ北部はザーウィヤ・ディラーイーヤ（ディラーイー教団）が、南部はザーウィヤ・イルギーヤ（イリーグ教団）というのが勢力を確立します。王朝ないし国家とってよいレベルのイスラーム教団です。そこに割って入ってきたのがサハラ砂漠のタフィラルト地方に拠点を持ったザーウィヤ・アラウィーヤ（アラウィー教団）つまり現アラウィー王朝です。17世紀はこの3教団が覇権を競い合う「三国時代」だったというのが私の認識です（歴史家はあまり「三国時代」ということを言いませんが）。そして三者が相争った挙げ句、ディラーイー教団はアラウィー教団によって跡形もなく壊滅させられ、イリーグ教団は南部で一時的に衰退し、アラウィー教団がモロッコの大半を制圧して、今日に続くアラウィー王朝を作りました。つまりディラーイー教団というのは、世が世ならば次期モロッコ王朝になるだけの可能性を持った大教団だったことになります。その大教団が潰れて何も残らなかったと思っていたら、ハムザ村という静かな山村にその流れをくむ後継者が生き残っていたというわけです。犬も歩けば・・・といいますが、私の場合歩いていたらとんでもない大きな棒に当たったわけです（笑）。

ではそこで「バイア」がどのように機能したのでしょうか。下図をご覧ください。17世紀頃の高アトラス山脈周辺のディラーイー教団とアラウィー教団をめぐるバイアの絡まり合いをまとめてみました。ディラーイー教団はメッジャートという部族の出身者がリーダーとなっていたので、当然メッジャート部族が柱になるのですが、ハムザ一族の後見人もいえるアイヤーシュ部族（図中の「アイト」というのはベルベル語で「子供たち」という意味）はイムール部族、ベニー・ムティール部族と並んでディラーイー教団とのあいだに強固なバイアを締結し、軍事的なサポートをおこなっていました。図の中で「支持・調停」と書いたのが「バイア」に当たるのですが、その一般的な説明は次回におこないましょう。なお、この図に挙げた諸部族は現在でも存在しています。さてこれに対してアラウィー教団のほうはどうだったのかというと、その拠点はサハラのタフィラルト地方にあったので、この図には書いてないサハラの諸部族が中心的なサポーター（＝バイア締結者）なのですが、アトラス山脈地方では「アイト・ヤフェルマン連合」と書いた諸部族がアラウィーとバイアを結びました。ただちょっと面白いのが赤丸で囲んだアイト・ハディッドゥーという大部族です。これはアラウィーとバイア関係にあると同時にハムザ一族ともバイアを結んでいたのです。ハムザ一族は当然ディラーイーの側にありますから、アイト・ハディッドゥーは敵対する二つの大勢力とパイプを作っていたことになります。「二足の草鞋でけしからん」と思う方もいるかもしれませんが、バイアは一对一の関係でなくてもかまわないのです。このあたりがイスラーム世界の面白いところです。





### {イリーグ教団への展開}

このようにしてハムザ村の調査からわかってきたことが、今度は同時並行的に調査していた別の地域の調査事例に連動してくることになりました。それが三国時代の残るもう一つの「ザーウィヤ・イルギーヤ」(イリーグ教団)です。この教団の本拠地はモロッコ南西部の小アトラス山脈周辺に広がるスースと呼ばれる地方です。ここもベルベル人の土地です。(モロッコのベルベル人は、同じベルベル語とはいっても話す言葉の違いに応じて北からタリフィート、タマズィグト、タシュリヒートという三つのグループに分かれます。すでに述べたハムザ村はタマズィグトを話し、このスース地方はタシュリヒートを話しています。)

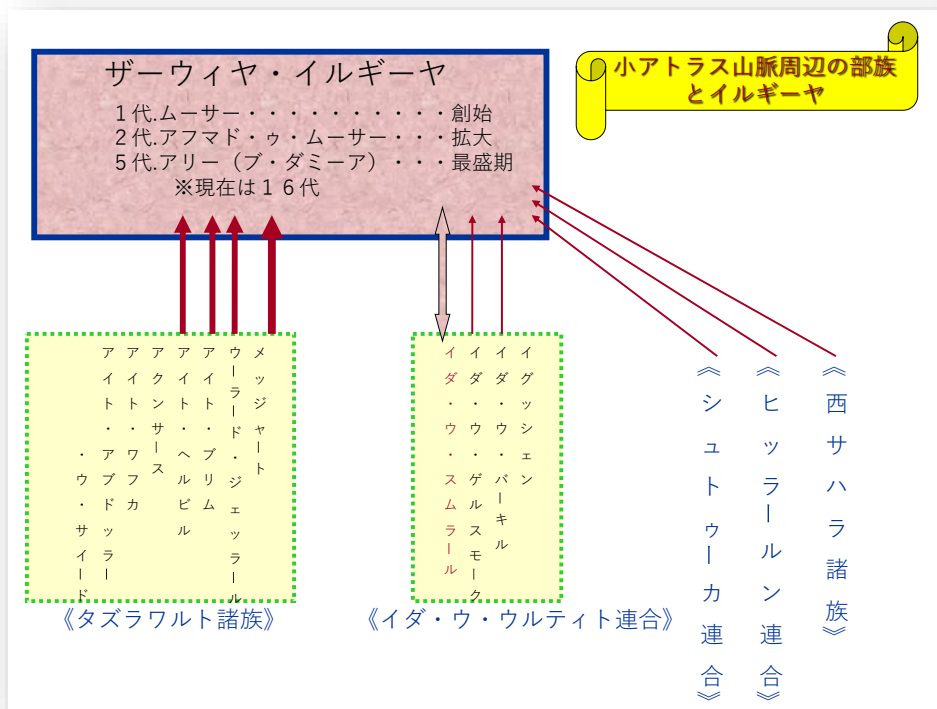
スース地方の村の話は時間があれば別途しようと思いますが、そのスースのイダ・ウ・グニディフという村に通い詰っていた頃、しょっちゅう話題に出てきたのが「タズラワルト」という語でした。どうやらお祭りの名前みたいだし、あるいはどこかの土地の名前でもあるらしいし、いったい何だろうと思っているうちに、それがスイディ・アフマド・ウ・ムーサ

一という名の聖者の墓廟が建てられている盆地の名前であることがわかりました。この聖者は「スースの主（あるじ）」とも呼ばれる大聖者で、その祭りが毎年夏に盛大におこなわれるというので、私も何度も見に行きました。そして平時にも、あるいはその後のたびかさなる調査でも、ことあるごとに足を運び、いろいろ調べているのです。下の写真はもともと最近その祭りを見に行ったときのものです。



スイディ・アフマド・ウ・ムーサー廟（2013年）

このタズラワルト盆地を拠点として、イリーグ教団が一大勢力を誇りました。スイディ・アフマド・ウ・ムーサー自身は15～16世紀の人ですが、そのひ孫に当たるブ・ダミーアという人が17世紀の三国時代に教団のトップとして活躍したのです。なおイリーグという名称はタズラワルト盆地の中の教団本部が位置していた村の名前です。この教団の歴史を語るのが今日の趣旨ではありませんので、詳細に興味のある方は《堀内正樹 1990 「聖者複合の構造-ザーウィヤ・シディ・アハマド・ウ・ムーサー」『イスラムの都市性研究報告・研究会報告編、第20号』文部省科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」事務局、東京。pp.22-40》をお読みください。詳述してあります。さてこの教団に関して、「バイア」の状況を見てみましょう。ここもディラーイー教団の場合と非常に似たしくみになっています（下図参照）。



教団の中核は「イダ・ウ・スムラール」という部族で、スイディ・アフマド・ウ・ムサー自身の出身部族です。この部族がハムザ村の場合と同じように預言者ムハンマドの血筋を引くアラブで、アラビア半島から流れてきてこの土地に住み着いたということになっています。そしてスイディ・アフマド・ウ・ムサーは、後にひ孫のブ・ダミーアが作るイリーグ教団の最大の軍事的支柱となるメッジャート部族の娘と自分の息子を結婚させたのです（ディラーイー教団の柱もメッジャート部族でしたが、まったく別の部族です）。地元部族との結婚によって地元の一員となり、そのあとに教団が作られ、聖者自身はそのプロセスの中でたいした政治的働きをせず、教団はバイアの拡大によって勢力を持つ。

ハムザ村（ないしディラーイー教団）とイリーグ教団のここまでの類似性に気づいたとき、私の展望は一気にさまざまな事項に広がりました。それまで結びつかなかったものが結びついてきたのです。そのひとつが「西サハラ」です。皆さんは「西サハラ問題」をご存じでしょうか。

-----

**{西サハラへの展開}**

googlemap でもなんでもいいですが、地図を見るとモロッコの南側が点線になっていて、その南に「西サハラ」と書かれている部分があると思います。ここは現在モロッコが実効支配していますが、民族自決の原則により独立した国家だと主張する人たちもいて、その

帰属がまだ国際的に決定されていない国際紛争地域の扱いなのです。いったいなぜこうなったのかというと、1912年から1976年までこの地域（「西サハラ」と呼んでおきます）はスペインが植民地化していたのですが、1976年2月にスペイン軍が撤退した直後、その3年前（1973年）に結成されていた西サハラの独立を目指す「西サハラ解放人民戦線」（通称：ポリサリオ）が「サハラ・アラブ民主共和国」の独立を宣言しました。しかしその2ヶ月後の同年4月、前年にスペインとのあいだで締結した分割協定にもとづいて、この地域の北半分をモロッコが、南半分をモーリタニアが併合しました。そこで独立を主張するポリサリオは両国を相手に武装闘争を開始し、「西サハラ紛争」というものに突入したのです。さらにその3年後の1979年、モーリタニアは紛争に疲弊して領有権を放棄し、「サハラ・アラブ民主共和国」を承認してポリサリオと平和協定を結びました。しかしすぐにモロッコがモーリタニアが放棄した南半分も併合し、今度はモロッコとポリサリオが全面的に軍事衝突することになったのです。戦闘がもっとも激しかったのはこの1979年から翌1980年の頃で、モロッコ軍は「現代の万里の長城」とも呼ばれた長大な砂の壁を国境線沿いに築いて防衛戦としました。その後戦闘は膠着状態を経てだんだん下火になってゆき、1991年に両者間で休戦協定が結ばれましたが、現在もまだ決着はついていないのです。この間ポリサリオは1976年にアルジェリア領のティンドウーフという場所に確保した難民キャンプを拠点とし、このキャンプを「サハラ・アラブ民主共和国」の臨時首都としてきました。いわば亡命国家ということになりますね。

これが「西サハラ問題」と呼ばれるものなのですが、日本のジャーナリズムや研究者のあいだでは、おおむねポリサリオに正義があり、モロッコは悪者ということになっています。国際政治とか反植民地闘争とか民族独立運動とかというタームで、それに判官鼻根も加えると、たぶんそうした風潮になるのでしょうか。しかしそれでいいのかという思いが私にはあります。なぜかというと、「西サハラはだれのものか」という本質を見ていないような気がするからです。じつはモロッコもポリサリオもそしてスペインもモーリタニアもアルジェリアも、さらに国連もAU（アフリカ連合）も、およそ関係する国や機関はすべて「住民投票」に合意しているのです。そこの住民が決めるということに異議を唱えるものはだれ一人いないのです。なのに紛糾するのはなぜか。だれが住民なのかそう簡単には決められないからです。不思議に思うかもしれませんが、これは紛争が表面化した20世紀後半だけ見ていてはだめで、何百年も遡れとまではいいませんが、少なくとも百年や二百年くらいは視野に収めないとはいけません。住民の移動がひじょうに頻繁に起こったのです。

なお関心がある方のために西サハラ問題の年表を作りましたので、以下をご覧ください。

「西サハラ問題」近現代史の概要

	西サハラ	西・仏	モロッコ・中東
1884		西・リオ・デ・オロの保護領化を主張(ベルリン会議)	
1884 ~1904		西仏:西サハラの境界線を確定	
1902	スマーアラ市の建設完了 (マル・アイニン)		
1910	マル・アイニンの北征(敗死)		
1912	アル・ヒーバの北征(~1919没)		西仏:モロッコ国王と保護領協定を締結
1913		西:スマーアラ市を焼き払う	(モロッコ&サハラの分割・植民地化)
1936	反西武力闘争の開始		
1956	アグダフが反西の大部族集会を開催		モロッコが西仏から独立
1957	S・イフニで反西独立運動が激化	西:タルファヤをモロッコに返還	
1958		西仏合同軍が西サハラで「モップ作戦」 (抵抗者を軍事掃討)	
1960			(モーリタニアが仏から独立)
1961		西:S・イフニをモロッコに返還	(アルジェリアが仏から独立)
1962			
1963 ~66		国連:西サハラ問題を初討議 (西は「民族自決」を承認)	
1970	各地で独立闘争が組織化	西:独立運動のリーダー・バスリーを逮捕(以後消息不明)	
1971 ~73	ポリサリオ(西サハラ解放人民戦線)結成、武装闘争開始(1973)	西:「西サハラ住民投票」を翌年実施と発表	モロッコ・モーリタニア・アルジェリア 首脳会議(3回)(民族自決を確認)
1974.08		国連:国際法廷に「西サハラの法的地位」を意見具申 国連:西に「西サハラ住民投票」実施の延期を要請	モロッコ&モーリタニア: 西サハラの領有権を主張
1974.12			

	西サハラ	西・仏	モロッコ・中東
1975.05		国連:調査団を関係5ヶ国に派遣 報告書は「ポリサリオの代表権承認」「独立承認」	
1975.10		国際法廷:モロッコ&モーリタニアの領有権主張を却下	
1975.11			モロッコ:35万人の「緑の行進」を実施
1975.11			「マドリッド協定」締結:モロッコ・モーリタニア・スペインが西サハラ分割を決定
1976.02	ポリサリオ:「サハラ・アラブ民主共和国」 建国を宣言(のち75ヶ国が承認)	西:西サハラ全域から軍を最終撤退	
1976.04			モロッコ・モーリタニアが西サハラを分割併合
1976.10	難民発生 (アルジェリアのティンドウーフに難民キャンプ)		モロッコ・モーリタニア合同軍: 西サハラで住民を攻撃
1979			モーリタニア:西サハラ(南半分)の領有権を 放棄・軍を撤退 モーリタニア:「サハラ・アラブ民主共和国」承認 平和協定を締結
			モロッコ:西サハラ全域を併合
1980			モロッコ:「壁」の建設に着手
1983		OAU(アフリカ統一機構): 「モロッコ=ポリサリオ」直接交渉と住民投票実施を要請	
1984		OAU:「サハラ・アラブ民主共和国」を正式メンバーとして承認	モロッコ:OAUから脱退
1985 ~88		国連:住民投票(国連+OAU)の実施準備 (モロッコとの調整難航)	
1989			ポリサリオとモロッコ首脳会談が初実現(結果は物別れ)
1991	国連:「西サハラ住民投票実施団」を結成 ポリサリオ・モロッコ間で休戦協定が締結	国連:平和監視団を派遣	
1993		国連:有権者確定作業を開始	モロッコ:追加リスト18万人を提出、紛糾
1996		国連:住民投票の実施中止を正式に決定 ポリサリオ=モロッコの直接交渉再開	

私は武力衝突がまだ続いていた 1985 年から 87 年までラバトの日本大使館で働いたわけですが、日本政府がこの問題にどう対処すべきかということは日本政府の出先機関である大使館としても当然重大な関心を払っていました。そこで私はいわば業務の一環として、西サハラからモロッコ領へ数次にわたって逃げてきた人たちが多く暮らすアガディール、ティズニット、スイディ・イフニ、ゲルミーム、タンタン、タルファヤといった南の町々を訪ね歩いたことがあります。なお、日本政府は当時から今日まで西サハラ問題に関しては中立の立場をとっていますから、外交旅券や私のような公用旅券の持ち主は西サハラに入ることにはできません（中立ということはモロッコの領有も承認していないということになりますからね）。まして当時はまだ戦闘状態が続いていたから、西サハラで調査するなどということは考えられませんでした。すぐ近くまで行くのが精一杯だったわけです。

そうした近場の町々で旧西サハラ住民に話を聞いたのですが、表だって政治向きの話しをすることはできませんから（どこにムハーバラートつまり通報者がいるかわかりませんからね）、話しは自然と「部族」に向かいました。どの部族かということならおおよけにしても一向にかまいません。そうすると面白いことに、人々は積極的にいろいろな話をしてくれて、特に私がスイディ・アフマド・ウ・ムーサーやイリーグ教団のことを調べているというと、身を乗り出すようにして西サハラの部族とイリーグ教団の関係などを話してくれるのです。そして下の写真にあるような当時のおじいさんたちは 1950 年代のことから身をもって知っていたわけですから、話は当然その頃やそれ以前の出来事にも及びます。そうやって聞き取った話や文献や統計資料などを使って私がまとめた西サハラの歴史と部族に関する報告書がありますので、興味のある方は読んでみてください《堀内正樹 1987 『西サハラの歴史と部族—専門調査員報告』、外務省中近東一課》。



西サハラに最も近いタルファヤの町にて（1986 年）

この報告書は私が東京の外務本省に提出した「専門調査員報告」という文書で、公開資料の扱いですから請求すれば見せてくれるものなのですが、おそらくもう保管されていないでしょうから(笑)、そういう意味では今となっては貴重品です。しかも先に述べたように、日本語で手に入る西サハラ関係の文献はほとんどがポリサリオ寄りのものばかりですから、そういう意味でも貴重です。西サハラにはいったいどういう人たちがいて、いつ頃どこからやってきて、そしてどういう経緯で離合集散したのか、その詳細がおわかりいただけます。そうすれば西サハラの住民を確定することが如何に困難なことであるのかもご理解いただけるでしょう。同時に、部族のあり方を理解することなしに西サハラを論ずることができないことも明確になるはずです。なにしろ西サハラの総人口は最大の推計方法でも数十万人程度といわれていますから、私の住む八王子市くらいです。それが日本の本州よりも広い土地をどうこうしようというのですから驚きますが(独立したとしてもそれで本当に国家を運営してゆけるのか、という部外者のいらぬ懸念もあるのですが)、とにかくそこでの内輪もめは国際政治やイデオロギー云々どころか、むしろ市内の部族問題ととらえるほうが現実的ではないでしょうか。

ひとつだけ言い訳をさせていただくと、この報告書を書いた時点では、私はまだ「バイア」を明確に認識していませんでした。少なくともハムザ村やイリーグ教団のような例に表れる「バイア」が西サハラにも妥当するとは予想していませんでした。ですので報告書の中では「忠誠を誓った」というような表現になっていますが、それはバイアのことです。部族とバイアの様相を理解することなく西サハラを語るなかれ、というのが私の思いです。

せっかくですから、西サハラを語る際に忘れてはならない重要な人物を紹介します。時代は19世紀に遡るのですが、1831年にはるかモーリタニアの南東部、今のマリに近いハウド地方というところでムハンマド・ムスタファ・イドリースーという男が生まれました。後に「マー・ル・アイニーン」という通称を獲得するので、以後通称を用います。ちなみにこの名前は「両目の水」つまり涙という意味です。マー・ル・アイニーンは幼少時は父が地元で作った小規模なザーウィヤでイスラム学を学んでいたのですが、20歳になる頃父の勧めで学問の旅に出ます。サハラ砂漠を延々と北上してモロッコ中央部のメクネスという町にたどり着き、そこでアラウィー朝の当時のスルタン(国王)の客となって勉強しました。やがて一念発起してサウジアラビアのメッカまでの巡礼の旅に出ます。

数年後、モロッコ経由で故郷に帰る途中、西サハラの北半分(サーキヤト・ル・ハムラ地方といいます)まで来たとき、地元の諸部族からイスラームの知識と調停能力を買われて定住しました。ハムザ村のムハンマドやイリーグのスイディ・アフマド・ウ・ムーサーみたいなですね。地元の部族の信頼を勝ち取ったといえます。そして30歳くらいになったとき(1860年頃)、モロッコも西サハラも西欧列強の脅威にさらされはじめたので、モロッコの国王に西欧からの解放と国土の統一、そして何よりもイスラーム法に専心するようアドバイスしました。

この頃まで西サハラの諸部族は復活していたイリーグ教団とバイアを結んでいたのですが、モロッコの国王がハサン1世という強力な人にかわると(1873年)、イリーグ教団とのバイアを破棄して、新たな締結相手を模索し始めます。そのときに相談役になったのがイスラーム学者としてのマー・ル・アイニーンだったのです。そして彼は西サハラは砂漠ばかりで拠点となる都市がないのがこの地方の弱みだと思い、恒久的な町を作ろうとしました。しかしカネも資材もないので、モロッコのマラケシュまで行って、強大な国王ハサン1世に頼み込んで建設資材を回してもらいました。そして自らをこのスルタン(国王)の西サハラにおける代理者(ハリーファつまりカリフ)と名乗り、スルタンとのバイア関係に入りました。そして西サハラの諸部族を糾合してイギリスやフランス、スペインなどが海岸部から侵入してくるのに抵抗したのです。しかしハサン1世が1894年に没すると、後を継いだアブドルアジーズという国王が情けなくて、スペインやフランスに抵抗する気がなかったので、マー・ル・アイニーンはそれならばと、西サハラ始まって以来の全部族統一戦線を誕生させ、独自に反フランス、反スペインのゲリラ戦を展開したのです。このとき精鋭部隊として活躍したのがルギーバートやアウラード・デリームといった部族でした(なお、ルギーバート族のうち、内陸部に住む東半分が後にポリサリオを結成することになります)。そうこうするうちに、1902年、念願だった恒久都市スマーアラが完成します。

しかし1909年にスルタンのアブドルアジーズが没し、モロッコの新たなスルタンになったアブドルハフィーズがさらに情けない人で、モロッコの北部はスペインに、中央部はフランスに制圧され、事実上の傀儡政権に堕してしまいました。これを知ったマー・ル・アイニーンは、モロッコと西サハラを守るには自分がモロッコの首都フェズに進軍して、フランス軍とその手先となってしまったスルタン軍を破るしかないと判断し、1910年5月、出来上がったばかりのスマーアラ市をあとに、老骨にむち打って北征を開始したのです。このとき西サハラの諸部族と、沿道にあたるスース地方(イリーグ教団の地元)の諸部族のほとんどがこの北征軍に参加したといわれています。そしてマラケシュを経てフェズに向かう途中のタドラ地方(ブジャド市のある地方です)でフランス軍と2ヶ月に及ぶ戦闘を繰り広げた結果、敗北して南に敗走。その敗走の途中、スース地方のティズニット市まで来たとき命運尽きて死亡しました。同年10月、享年79歳。

しかしこれで話が終わったわけではありません。マー・ル・アイニーンの息子アル・ヒーバが父の遺志を受け継いで、今度は自らをスルタンと名乗って再び北征を開始しました。そしてマラケシュまでは堕としたのですが、結局そのマラケシュはフランス軍に奪還され、スース地方の拠点だったタルーダントという町もフランス軍に通じたグラウウィーという一族の手に落ちました。さらに衝撃だったのは、故郷に父が作り上げたスマーアラの町が1913年、スペイン軍によって焼き払われてしまったのです。この象徴的な出来事を機に、西サハラは名実ともにスペインの植民地となり(名目的にはそれ以前から)、約60年に及ぶ実効支配を受けることとなります。そしてアル・ヒーバは徹底抗戦を続けましたが、1919年に、戦争で受けた傷がもとで死亡しました。一方モロッコでは、1912年に、スペインが領有し



た北部を除くほとんどがフランスの保護領（植民地）になったにもかかわらず、スース地方の諸部族は1930年頃まで抗戦を続けました。

さて話はまだまだ続くのです。モロッコでは植民地体制下でも各地で反フランスの独立闘争が展開されたのですが、西サハラではこれらと連携する形で反スペインのゲリラ戦が継続されました。その指揮を執ったのがアル・ヒーバの息子であるアグダフという人物だったのです。アグダフは1956年に至って西サハラ解放を目指す大部族集会を挙行し、主要な30部族が参集したということです。この年はモロッコがフランスとスペインからの独立を果たした年ですので、西サハラ住民は置いてけぼりの焦りも感じていたのでしょう。この集会で植民地からの解放の気運が高まったのはよかったです。南に隣接する仏領のモーリタニアに独立運動が伝播するのを恐れたフランスは、スペイン軍と合同で1958年、「モップ作戦」と銘打った大掃討作戦を西サハラで実行し、このとき爆撃から逃れようとした多くの人たちが独立を果たしたばかりのモロッコ領に逃げ込んだのです。私がタルファヤなどの町で話を聞いた老人たちはこのときの避難民だったのです。さてアグダフがどうなったのかというと、彼もモロッコに避難したのですが、1960年にモロッコ領のタンタンという町で病死しました。奇しくもその年にモーリタニアは独立し、1962年にはアルジェリアが猛烈な闘争の末にフランスから独立したのですが、西サハラがスペインから解放されるまでにはさらに十数年を待たねばなりません。

これが「西サハラ紛争」が勃発する直前までのおおよその経緯ですが、ここで理解していただきたいのが、マー・ル・アイニーンから数えて親・子・孫の3代にわたる闘争を支えた主役が西サハラやスース地方の部族であったこと、そしてその関係がハムザ村やイリーグ教団と同じようなしくみ、つまり主従関係などではなくて契約関係であったことです。それがバイアです。そのバイアはマー・ル・アイニーンとモロッコのスルタンとのあいだで結ばれたかと思えば、状況が変われば躊躇なく破棄される。契約関係であるからこそそれが可能なわけで、契約当事者は対等な立場にあるのです。もしこれが主従関係だったとすれば、裏切りとか謀反とかいうことになるでしょうが、そういうことはないのです。今日はだいぶ話が長くなってしまったので、次回「バイア」とはなんなのかをもう少し一般的な形ではっきりと説明したいと思います。中東やイスラーム世界の政治を理解する上で必要不可欠なキーワードであることがご理解いただけることでしょう。

なお蛇足かもしれませんが、マー・ル・アイニーンは没したティズニットの地で廟が建てられ、毎年彼に因む聖者祭（ムーセム）がおこなわれていますし、孫のアグダフもタンタンの町でムーセムが祝われているそうです。聖者になってしまったんですね。



マー・ル・アイニーンの廟 (左)、棺 (中)、ムーセム (右)  
ティズニット市にて (1994年)

### {もっと南へ}

長くなったといいながら、おまけとしてもう少しだけ。話がハムザ村～イリーグ教団～西サハラへとつながってきたところで、マー・ル・アイニーンが生まれ、そして西サハラ紛争にもかかわったモーリタニアというところも見てみたいというのは人情ですよ。そこで1995年に見に行ってみました。マー・ル・アイニーンの生地ハウド地方は遠いうえに道が悪いということで行けなかったのですが、北部のシンゲッティというところには行くことができました。シンゲッティは昔から西アフリカ方面の人たちがメッカ巡礼に行くときに参集した場所として有名で、また学問センターとしても知られていて、たくさんの古文書類も保存されていると聞いていました。残念ながら古文書の保存状態はひどかったですが、モーリタニアが砂漠とベドウィンの国であることは実感しました。



シンゲッティの遠景



古文書



シンゲッティの旧モスクと私



ポリサリオに砲撃されたあとが生々しい発電所



砂漠のベドウィン

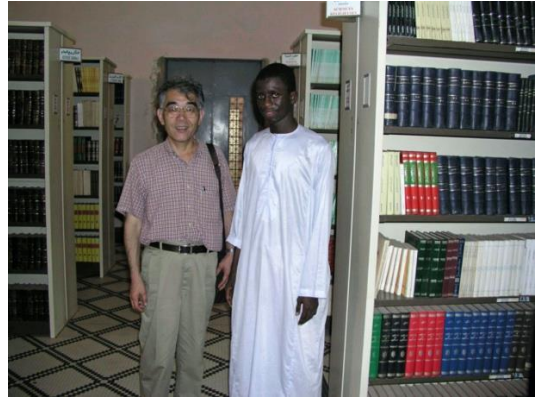
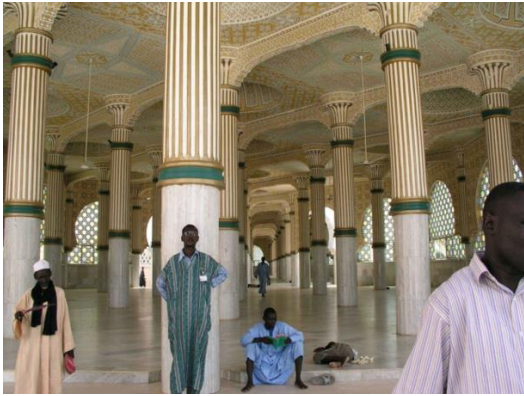


お母さんにクスクスを作ってもら

---

### {もっともっと南へ}

モーリタニアまで見たとなると、さらに南へ行ってみたくするのが旅人の心ですよね。2005年にモーリタニアの南、セネガルへ行きました。ちょっと内陸部にあるイスラームの聖者アフマド・バンバという人に因むザーウィヤ（ムリード教団）を見ることがと、伝統的な音楽奏者グリオに会うことが目的でした。



セネガルのトゥーバという町にある聖者アフマド・バンバの創設したムリード教団の本拠  
大モスク（左）と付属の図書館（右）



セネガルの伝統的音楽家グリオとともに



首都ダカールの魚市場

\* 今度は内陸マリのトンブクトゥへ行ってみたいなあと思っています。

おわり